焚註列子

朝倉
1790
1

門へ13
帙1730
巻一

異國風俗笑註烈子叙

夫天地空中之一細物。有中之最巨者也。故以我天地爲天地。則天地亦爲一細物。若以我天地不爲天地則爲最巨者細也。巨也難終難窮此固然矣由是觀之於我大道亦復爾爾獨以我大道爲大道則大道亦爲一細物若以我大道不爲大道則爲最巨者細也巨也難測難識此固然矣可

謂玄玄衆妙之門者乎哉。予閲烈子散人所編之書。以我天地不爲天地者乎。故以我天地不爲天地者。則能可讀此書焉。若以我天地爲天地者。則不可讀此書焉。凡天地六合之間。無有有有無無。是以難終難窮。玄玄衆妙之門者也。覩者不可以不察焉矣

天明改元之秋　武陽夷人原之道識

序

文筆を嗜ひ事紙墨を好むは性なり。予が幼時より性好むよりして志かりまなり。予六歳の春の初より。書を学ひ。八歳にして入徒の門に通り。十三歳ばかりにして書籍の事を考み。漸く汲しらてさまざまなる寢不足を忘れ時々安眠の癖を忘れも屑とせず。さまざまを味ひまを味ふと雖よ年ひり。一日学友大酒に溺ひまりて。予が之春の書籍を好み。寢不足を忘れ安眠の癖をも厭ふを評して。かの炭を売る翁に似たりとも笑ひき。而予なるものの傳ると。懷より身を出せる炭の

烈子敬人が編る書一本を出して云ふ。辛を
冷ふ嚊ひらふば。此書を一論ずべし一と書の業乃
ふ罪て去り也。予おもきを拭きおさ〳〵味ふ。食
料乃食ふハひらぎれども。猶食〳〵なりと称ん
じて捨ふもひらぎ。いまだ鶏肋の鶏肋乃書を
形そ。味ひなき酒を飲むと亦辛を好むと
さ〳〵絶なきバ。正文を味ふ吾同志乃者〳〵業を
ひたくなやと。一二乃さとの業を摘みそうてこだりふ
書きちら〳〵侍るを乃形か

辛丑改元〳〵初秋　燕都　矣止子

異国丸俗　笑註烈子巻之一

烈子暑傳

朝鮮辛慶子が陳奪滝書小日大日本国東北の間小島りて
蛇夷と云ふ解国ひらむ〳〵此所ふ烈子敬人と云
家富一貧人ひら其父ハ風烈翁と〳〵母天波と云其
先祖ハ雷電王と云此南電王ひらう虹飛といくる
后と鶏鈴乃不仍妻ハ〳〵初ア男女交合の操を貞淫
のあ事延生ひら王子ハ龍納を子と〳〵来無ふハ蛇
行軒と云風烈翁ハ男子なり烈子と名ぶ謂ら
風烈翁乃子なるハ〳〵凡烈が子と云ハ異して音イ
烈子と称るとなん紫ふ北條甲斐時政が子の故ア那
古へふ山例を〳〵子小名ら　〳〵烈

子ハ百万年鹿の子の猫のこゝ一十四月狐の日ハ延年
いう契子まれし紫の雲もたゞさして奇瑞もかゝる
しるしや生れ出しかゝて聰明睿智かゝず迄たゞて
白痴ともゝ人ぞ十二経十二家二十一史などの書目ハ生来
ふも通じ筆墨の道もかゝ一ハ永福寺一戯亀云乃道
へも学りて西洞文章也又ハ京の古保珠数や所々ぞと
一口や二口ぐちハ冷られぐ此外剣術事術弓矢鉄砲
水馬兵法道の事ハ申もおよばず茶人の作ハ流大師流
好み飲とゝ也線の百川流ゝ。松茸なゝ
渡り遥里の事ハ桃洞一松前浦ハ妻く紀名
京名と作ん又父風契義ハ交易の道ハ急ぐ家富

例ハ流ゝ世ぐ大雨の後川ばうゝハ逆合流
のゝくなるゝ。ゝ人の一度ハ御ゝ孫ばなゝぬゝハ何ゝ乃
浦でもゝ家ゝのゝ。風契義ハゝ一ゝ風のゝゝ小ゝ
ゝが開く華りて今ハゝ岐伯扁鵲も寸匕流青嚢え
海義周公旦ゝ命請ひ。ゝ清ゝ貢もゝ小ゝ験
ゝ。元三大師の御家ゝ一百歳ゝて大区なり
巫女乃詞宣ハ。此病ハ正一ゝ祖ゝ烏猫赤猫の変搖
ゝ祭ゝ年ゝ祈ゝ一紀念ゝ原ゝ。今
ゝ崇ゝりてゝ今ゝ一ゝ人ゝ作ゝ。時ゝ祈ゝ龍神ゝ
ゝなゝゝゝ。出ハ乃人ゝハ四ゝ流宋ゝ俵
宋或ハ等守ゝ作ゝ来り又ハ書須ゝ

きべき時に成得たりと人の弁ひ書ものを慈欲のるを事を
とかりて主人の病を平癒祈りのなあ某の仲其の佛
百度ばかり此物ひたりと陀羅の形を小今祇園堂
を引攘め四くに己の業障業を無ふ都ふ事を徒もつ
業を事ふかる限雑の対八和尚
ともふく祝ものすりくつけく東面八御ふ一乃寓此ろたう。又八量
罪ふかりて蟲紙ろうふがて行るろ。よく下えと圓祇
深ぎ。牡丹孫の席切りふ。ぬきでも死せ命有
り祈ふ風災篠八月年百五年ふして流寄言乃下亡
とみまがりぐ。庸の天助ふ一年おろうしを毎晩陳
祝ふ疫病ひのとのふ。ものしひぬきふ
祈祷ひり

業を事ふ庸の天助義明八行年七十九年ふして。のたれ死を。今
百六つとふ八ぬきしく疫病ひ家の諸ふよるなるべし

ほまに同ある人々亮毛
さぬく思ひ奈色一さて母の天助も亡迦一夫。のる紙
明書忠墓かのれ庸作世態が文紙墓ひ石を彫りたるを
く臨彼脇乃病を弟祥猛石の孫ふさくりて
慶八月年七月十七日陶麓大王乃秋日小仲葉の病
とむ。ものを迦祥んを孫ふとひ子ぶとひ刻子年三十
七八ものて二親ふ別まこたのを不ものを祝ものて
御ふ望く寂くりて後ふ年月成ものるる世諸事
の家太夫本ふ行る空り四年成ものる。支配人を殺
んを祝り八公祝祈貨成ば蛾乃業成むくばるり生物
とさまを乃牡丹仕祝成ふ正服一脇て祈脇八祈脇
お無ふ勝を乃仲西彫成拘ふ一一僮児小牌八佛前

乃陰物をんぞと擬食ふごとくなれども信ず潛夫論に
一犬形を吠ゆれば万犬虚を吠ゆと有り〻〻万金積
高る富家も家宅ふしてたゝ病ひ〻〻ありそれ
鼻乃下に大小を差さしめ紙ふ人ふたりとなりて
さらりを洗ふ〻〻ふ新しき紙はけ設て紙帳のかた
者どもたゝくも皆紙ばくしと
と以前厚交ぶかくつる人〻もう冠儺のごとくふ
欲ん乃鐘を撞き鼓を打くと乃癖乃礼がはく絶ふなりぬく
と乃謀ほどふ出入乃賈人八通の帳（書付）紙して矢
を責み（楽ふ商ひのしけか俗婦の字を用ひ平生人易き醫者八
家牙の撓中〻）衡　并ふ下人乃賈人ハ出不乃姪

ふ朝京渡りの犀角乃用ふ求めふる屋しれど舌を
振つく価貴ふ為ふ族もいう。乃真屋ハ茶器を〻〻敷き
呉服屋ハ当世好乃源の伊達小紋のこと。月紙奪ふ攻め乃
具を打連び。極市屋ハ部石の。或ハ石燈樓石を洗金魚の。
又ハ藤浜紙。南禾の形紙〻〻攻め入り。工人ハ楽乃陽
法蒲。又ハ遊山不形ごの法文〻〻。かのごん紙恵ハ
神乃前ハ荷ハ疫除乃祈り災難除乃祈乃特或ハ星祭り
の門前ふてひのと拵く乃新作ぱく〻〻呼れ紙師〻檀
那寺ハ形もなき光雅の寄進紙をゆるの形ふ
ぐ〻ふ邪計紙〻〻かが乃美金の紙廓を攻め落し
秋物ふせんふの巧者でし或人〻〻我日なかふ〻〻人の行ひ〻〻
ハ人〻生れ〻〻ふして拵業れれで

列子が貧を破家なるもの―又かく人欺くものもあり―蛾夷ホ々
かるすもらるる心やかく蒙を啓く家の仕元りあ彩ホ別れ
て人の ふるふ心を乱れ蒙ハ[illegible]きふる低ぐ[illegible]
我もくとびやう―忍ホ猛子仕方ホ[illegible]
ハ[illegible]―又評者のいく列子も門[illegible]の白痴
ホてハ[illegible]れどかくれ―ハ前車のろがるを[illegible]後車の戒め
[illegible]ん[illegible]そも―さの列子が人となり[illegible]ホ来
一人あ[illegible]て父母の寵愛[illegible]ホ[illegible]
ふ[illegible]ホ生育―津あれバ一句憂世の事ホ[illegible]の
教をだホ[illegible]の[illegible]ホ人々のふるふ金銭を奪ひ
[illegible]僕のたあホ家[illegible]
[illegible]ホ[illegible]列子一人をバ大勢寄り集りて欺き[illegible]
ハ[illegible]ホ[illegible]ホ[illegible]
[illegible]ホ[illegible]

黄金の城郭を攻つ焦せ―[illegible]ホ敵の軍兵ホ又我
[illegible]ホ―ものたも[illegible]ホ[illegible]ホ[illegible]
もあり[illegible]ハ[illegible]ホ[illegible]ホ[illegible]
の[illegible]ホ[illegible]ホ[illegible]ホ[illegible]の風[illegible]
ホ二一物作り濃り涙せ―金銭ハ腹城下―衣服
[illegible]ハ貧ハ[illegible]市衣[illegible]
[illegible]米食ハ蔵ホ[illegible]書[illegible]
雨が[illegible]を流―[illegible]の破れ[illegible]ハ月や星ホ新[illegible]
[illegible]子ハ引裂る障子の紙ハ[illegible]
[illegible]ホ[illegible]ホ[illegible]ホ[illegible]
水が漏る時ハ足が[illegible]る椀ハ欠け[illegible]服ハ空[illegible]

きれバ錢ハ難足ル。金ハ忽差ル。人ハ不一ル。草履ハ弊ル
下駄ハ歯が折ル。徒ハ行ハ足ハ近ひもや出るなり
なすりて一ッくしても我のすゝふかうすれしハふ親に
孔子の度思ひ出したかうすハ古人の語ふ善き分別を
君に隠れで出るとふ勢ふ謡の郷くも圓ふ座際居くも
善分別とそハ一ッも出ず　葉山にさへ宝て出るとそハと穴下ハ放飯の出のこゝらんえゝや分別の出るところおそし
古人の教ふまとき一色のきところハかゝうえをさき夢かりとハおもれとおすそふなし　目もえや賢ふ及ひがたれを
孔子ハ後疲たそ病し孔家ハ出て席上ふ精酒
今ハおの孔子が祈る神も佛もあきれやそ絶せ聯ふ続
佛のかバ釈ふ善分別を授け給へやと天に祈ひかり
祈りて我ハ今色くへど此落しあくらく甚恵

なりけるが火をともす燈乃虫やぶまし晴覚へ蝴蝶一ッ飛翔り
是ハ荘子きうと眼をつけ我手を搏て若きと欲て
そろく我が力乃奇特にや天より授ル一ッ乃蝴蝶されバ
で実乃先年ハ作く有ッ荘子ハ夢に蝴蝶となりて
あそびしく遊びまきしとかん我蝴蝶となハおふぞとも
せめて蒼蠅になりとも転せ変し憂世をのがれ人
間が小遊びたしと志きりに思ひ込思ひあぐみ五臓六腑へ
を思ひ込篤と我が思ひ案じ我身にも紙の望の通りなと
蒼蠅となりてもそろし蜘乃巣にかゝり我が諸ハ
一虫乃なかに分ひがき命を失ふんすいらひらくも
浮き氷に嘴ひふむさし聖人ハ危ふにちかよらず

あるときハ胡蝶天より飛来る人の子のかふぞ自業自滅
此不祥を叩むとて出合ひて摺扇をもちてそうとおつ 業まる所に
くるとおつるさじふたと志らし时刻子ハ又て思案ふ凝りて居たりし
俗人の濃ふ可憐なるハ旅にさせよとなるぞく今より
我ちの生を去りて日本六十六ケ国ハ不及ども唐天
竺三千外国にもなんぞ女も及ぶ無みの情をも歴行し
おとの風俗又ハ数州をも分ふひも一見して尊び故
御へ知り給ふ所を流人ふいふれも名どかる天ふ光曜
さん云ふる給ふを与ふりけるし容易のりふふかぞ
評者のいはく。さるよし傑の張審得ふなりける小りきそ宮ふやく岩窟
山をふて知りしとなん又日本ふそもこしそ名高き仙人の洞窟できく
もし深ふ彼与り揺とれふ外一倍なりける及びや烈子
濃ふ天竺三千外のまくを与へんとハからぜひと思ひ給ふ之 与ッ飛くのちく

骨ふて山川万里雲井の往路おりおびさとハ思られぞ
志らざりれど念力岩を透すとふ漢乃李広が石を虎と
伏たる虎と思ひはく。おれを射るふ矢乃羽ぶそを飲む
とかれど我飛廉が足ふ荒田無谷二人乃三郎が健足
を借ッて步行ほどなるバ万里も万里も遠からじと。ちや
虎の子のくをとして千里も一時ふ走らんとハ也ひられ
ども、いふしても路のかき旅なれハ西は神佛乃力をかる
ほんバ也れ朱就ならふ如と思ひ付。一七日がうち精進
潔斎沐浴を抛ひ。天神地祇を祈念していく
南無天地ふ行ふ神佛、我が思ひたちし路ひを叶へ
給へと八説ふを与ふ日数うちた餘の疲瘦ざる程り

まゝの風俗をうつしめ給へきめりなちらびしと西で拝み東を拝み一心に祈念しけるあんばいにしても備りしども神通さらにえなされバ列子今ハ耕もなく、いかく徒然さバ茶ぶらくせよさ。倩ひ償ひにくつけ。露しうち流ど流すんとせしおぶ俄に黒雲群だち雷電しきりに鳴動しけれしも。忽ちが織く炎をまとし列子を把攫で何ともなく上ざまにきしとかんえくしが忽ちしほどして暗くなる蒼天に飛のぼりたび。嶽くなる高山乃絶頂に安置して獨坐せり。列子ハ夢のことくして四方の景色を一望すれバ何ぞいなる所とぶすをしらるぞ。いなにも駿河の富士

山か天竺とやらんにありときて須弥山か。但し仙人境にありや芳野山かあらん。我ハ八百の修行をへし神佛のばちのみありて地獄の死天の山とやらんいふところ。今更に後悔しけるに又く大風吹来るとかんえへしが。かゝへ乃岩石乃上に年の頃九十あまりの柔弱と見ゆる美女年忽然として顕ゞ出てのたまはく。翁せし。これはまた天地乃間に彷徨る風来仙といふ我しもの也。或人のいふ列子は常に黄なる衣を着て天の上に住ませしといふ。汝いしくも天地の外に祈念せし。奇特なりし流来人の徒らとして其紙をさうひ。海が既に飛も今は山よりは世尊なりし。扨我は八百年眼鏡をかけて日本支那天竺を一目に見て

委くしく一流に出べしとかの孫子八法の
うりかくし扇にして眼鏡をかくし四方を眺
望するに日なれば眼力の傷ふ顕微とて西洋南京
機巧の霧をふるはしたるに夜は天竺三玉を
一ふしてぞう市の陰ふもかんぬきとしたる
ぶりくに成ぬ海軍を一ふの陸にたれば
わろうの名ふ之ひ生を八胸中小船めぐり。ゆるる
者頭しておのの眼鏡をば成ぬ事ふ指ゆ
ていくく。我国の平行の角ふくしを一流せんとのり
たれをんる色さ眼鏡もかりやせんと問はれば
はれ事ふの名ひ名ハ名ふ名とくば法ふ顔一

今ひとつ十万億土を磨ぎてハ高くくとあきもくと
ふるすかりいらぐ九外ふもふかりて日ふ傳ふ天竺二
を一ふしてたゆるふ山ふ山して多数ふれず地十万
注ふ名くくえきのふを名ふ能業者かりこと
業者を扶るふ一ぐり保風一又ふ方年間と
ふ四間かりけ間を一陶泡ふ名ふ月ふれを腰ふ指ゲ
て旅中市販のせろのしを風一ろとも端ろるふ行ひ
いざ和まれと孫子を扇ふうぐ風ふ沼ふ水事市
ハ中天を孰し出と何地とも市花ぐ〜ふ行きるが
浮智のふ二ヌ見ん浦とふ名ふ名ふ西へはれ四きひ名ふ染
一ッの船を名ふ月ふ行ふ千名ふて東を見ふて小帆

掛けて行う屋一さてふばりを巻と書面を深く
（要ふ）ふ屋一又板別ふ仏ふ寄ふ寄ふ
海う親八城う義親風の神を深く信一城外ふ
屋ふを行一屋根城吹き吹てりぬるくせるも。
一向罵詈もいそぶり一丸烈義風の一種ふ。風の一
字を書一丸烈義と名つけ一丸烈義と名付
神の伝八船とし一丸烈義と名付
縁もなれど海ふ渡船樫とて三宝荷の樫を与
る月渡船月の中の中ハ付ひ樫る振り出して
しと後一振りなれば烈子ハ感涙を流一件の中を
義海しそそぐ。でも付、樫城城れ行える山と

行ふいるるきされ山ふてひるやと問ひ者ハ丸事神の
仏面ちく糸ふ一ふもれ経問者ものの山あて八大地
分生出仏山ふて一中宇ふ叫りれる丸事山とて
丸の神城城ちまても城一眷属の住ひ海ふ
なり一時ちるるもれるんれ大雲城城ちる時ふ
宇ふ雲城ちとる一ハ雲中の住ふ風事山乃形ちり
ちる石時ふも振り出れバ海もるる一ひ経ふ寄りて い
て一風一城も住ふ一ひ経ふんる夢又行来ふ海一
中吹事ふ風ふ神ふ吹ふて丸事神ハ吹ふちり烈子
ハ行方ハ伏城み一件の樫と個海を懐抱えて
経ふ神ふ帆り帆を郷少城保さ一考ふて東を見行て八

ゆゆしきことなり　或人いはく　いかなるもの　或人いはく　いかなるもの　或人いはく　いかなるもの

大酒公の評かいてゝ風刺の為に富貴子教人ハ
衰へ〳〵貧となる元盥箱ハ衰ふ天ハ行ふと
信ずとの〳〵盥ゐる衰るも酒の事とて佛教ふてハ
五云の因縁と一にかいてんふハ海の一きれとも
なしまぶ凡到為の到子を愛みてとかゝハ的ハ
未熟なる生育ハ八方向しきりすれ又いかゝ
をしてまぶ子を愛みてとかゝハ同果まるた
人の教訓の子ハ八学ふ学ハ八学ふ
折檻してこゝも学問を日夜精ゐ千里に

学ことせずして善師に付たりて人たる者ハ
学ハ人ハ智を学ぶ者ハ物くの理ふ明らかにしむ
我家の業とする事をバ先ハ親の意ふ違ふて陸ふと
教ふ教訓ハ一かりふもいつき友ふ学ハ人ハ
ものゝ学ハ人智者ハ義乃人ふ近ふ
しめ汝ハ学ハ人ハ胸中ふ満ち財ハ
てんぐ〳〵き死をとゞめ〳〵むかしふ
学ふ子を寵愛するとい〳〵ハ武人ハ
ていゝ〳〵ふ法文のとゝりふ親も子ハ
ぶんの一人の生涯ふ可ふ知ハ為ハ
ものゝ一ふ為ふ也〳〵ふ学ふて

やうよ事う備ざるハ凡烈婦父子の日浅深して
何孫くこを数ふ悪ぜしむるとこ在のこく凡烈婦
丹誠を尽しても烈子一向父命にしたがふ白廓
ふの女は巳とききくて天命えとも因縁くとも是覚
諸を定先て後見といふすもあれバ伊尹傳説が
とき良臣先後しく烈子ふ傳置肝いく恩き活ふ
むざく今滅財宝を奪れ先祖の墓不祭祀をも怨
ふ家を破滅せる親の甚微ふハ恥る所じくしかく乃
ぐらし良臣を傳置ても力來見うるけさるすくと畏
れどおれハ先祖分文附え一ー家ハかえぐらきし世ふ
愛子なりともおれを追退け親族中々之と他族を

之た良才ありて家をおさめ先祖の祭祀を廃ざる
ほどの人を見たんで我家の子とさだめ聖賢乃親
短にも叶ひ色きらぬ先祖の祭祀といへバ何ときふ始
れどいふおそきすくて古聖人もいのち日ハ後を無法
やられし先祖の祭祀を廃て家を滅せるふ恥ん
よりハ大罪人となりいかんぞ大わざやいかんぞのれと
今故ありたる例ありとて是ふ尭の帝舜の帝も
孫ふ七聖人のころ乃巨聖を蒙ふて何にもし
おも太子ならハいづ定も起とりなる寧濁を侵
ちせなくハ名こ耶ふ子ふ天下を御ゆずりなされ是
の帝ハ他人の舜ふ天下を譲り又舜の帝ハ他人の

周王小天下を譲り二人乃太子へ相続を弱て
流浪とかしこなるとあんとされ二太子たふ天下は文王
方氏をさきむ愛きし君臣海内をさんて他人ふ
譲りて孫子の情はかりき給ふ愛ゆんや二太子
小不肖なる人なれハふもさふ天子の位は譲
方氏の後を知し給ふんなり給ふ方氏の養いうるかり
命ふんる我為ー給ひかくハえかふひ給ひをわり
され養を愛き河子ふ試退ゆ方氏の為ふ他人り
聞信は譲り給ふ方聖人の所心の厚ー沢さ仁徳の
深ど感ふふ物隔りうかいうえハ内外子父子乃
評ハ竟舜の帝ふ試ー給ふ沢を云ふざるすべ

行ふ笑ふ人やなふんれど予が評ハ厚情ふして
呼ふ乃田夫野鄙ふ苦ふのを又予は侮ふ笑ふ人
ハ古今の書籍ふ称りいふも侮の君子といふ人
ふ忘ふ行ふぶれハ井中の蛙の遊花の徒ふんは侮
の君子ふ笑ふれて恥るるれー又井中の蛙蓼
花の徒の譏ハ行ふれハ蚊とふ小虫ふ音ふ試
発して呼ふるれバさもふんと相笑いふす
ふて今ー行ふ人の多を毫出るを見ふふこをの
無きを加るるるを行ふ遊蛾ふ人の為ふ行
そふふ生育る苦ふ毫と知ふハ友てもれ
我子ふして是御ふ育ふ他飾ふ行ふこを考ひ

家財滅亡せしむる毒は人をおとろかすべし凡人乃
父母なる者は子孫を愛してたゞ寵愛をこのみふかく
今小むるところの利は貪欲をとゝのゝ子孫希有
なるべしと覺る人々はこれを察し給へ愚しと
いへども人のふかくこのみさいとの形は海ふかきもの
なり

呉注孫子卷之一